講義余聞

ライフセービング

法学部　小峯力　兼任講師

全国の学生リーダーに講義

「限られたサーフ（水辺）ライフセービングではなく、私が日本に伝えたのはライフセービングです。Always、いつでもどこでも救命スピリットをもって他者を救い守る人間でありたい。願わくば、救う（事故対応）ではなく、限りなく守る（事故防止）ポジションの視点をもって、圧倒的に利他の精神を鍛えつづけましょう。夏だけが本番じゃありません」

小峯先生の力のこもった声が静かな会場に響く。講義を聞くのは全国27の大学から集まった81名の学生ライフセーバーのリーダーたちだ。

この日（2月4日）、小峯先生は、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた日本ライフセービング協会（JLA）主催の「第8回学生リーダーズキャンプ」で、約1時間講義を行った。

講義の最後に、ライヒセービングの活動を伝えるビデオ映像が放映された。「世界で年間40万人以上が水辺の事故で死亡。1分30秒に一人が溺死しています」という実情が紹介され、ライフセービングが目指すのは「水辺に広がる笑顔」「安心して遊べる水辺」「そして誰もが助け合える世の中」とのメッセージが流れる。

「ライフセーバーよ、静かに社会に帰れ」とのタイトルに続き、ビデオの締めくくりに表示された「人のために尽くすことがライフセービング」というキーワードに、小峯先生が言った「（ライフセービングは）いつでもどこでも」という意味があらためてよく分かった。

◇　◇　◇

小峯先生の法学部での「健康・スポーツ科学A（ライフセービング教育）」の授業は、学生にとても人気がある。この日の学生リーダーに対する講義がそうであったように、授業はいつも学生との対話で進められ、学生からは「教員に熱意を感じた」という評価が高い（2011年度法学部アンケートの「特によかったと思う点」の問いに対し、79・7％が「熱意を感じた」と回答）。

他者を救い、守るライフセイバー

また授業を聞いた学生からは、「命について深く考える機会を与えて頂き、私自身の生き方を再度見直すことが出来ました」「自分の気付かないことを教えていただいた」「命の尊さについて深く考えさせられる授業でした」「人生に対する意義を考えさせる授業でした」といった感想（いずれも同アンケート自由記述欄

より）が多く寄せられている。

◇　◇　◇

日本の草分けで、普及に奔走

小峯先生は日本におけるライフセービングの草分けだ。現在はＪＬＡ理事長を務め、普及活動を続ける一方で、ライフセービング精神を説くことで「人間づくりの教育」を推し進めている。

「30年も前ですが、僕は湘南海岸で海水浴客の監視をしていました。そのとき少年の溺水に接し、人工呼吸や心臓マッサージなど必死の手当をしましたが、すでに手遅れで救うことができませんでした。悔しかった」

若いころの水難救助活動で心を痛めたこの体験が、ライフセービング活動に打ち込む原点になった。小峯先生が、いま、その普及をライフワークにしているのは「少年の死に対する償いになると信じている」からだ。

少年を救うことができなかった小峯先生は、ライフセービングを本格的に学ぶため、オーストラリアに飛んだ。そこで「大きなカルチャーショックを受けた」という。

訓練で荒波の中を泳ぎ、半ば溺れかけそうになった小峯先生は、オーストラリア人のライフセーバーに助けられた。そのとき「苦しいか」という問いに「もちろん」と答えると、そのライフセーバーは、続けて「君がその苦しさを忘れなければ、善いライフセーバーになれる」と教示した。「オーストラリアでは、あえて危険を体験させることによって安全を導き出す『身をもって経験する』を優先する」ことを実感した。

また、ライフセービング本部には、車椅子ライフセーバーのポスターが飾ってあるのを見た。下半身に障害があるため、泳ぐことはできない。しかし、波のコンディションや天気図を迅速に察知する能力を鍛え、その危険を無線で知らせ、人々を危険な状況から回避させる。その姿に、小峯先生は「ライフセービングは、誰にもできる。人の命を救いたいと思う心があれば、身体的ハンディなど、ライフセービングは否定しない」ことを学んだ。

生命を救うスポーツ（レスキューチューブレース）

車イスで無線連絡するライフセーバー＝オーストラリアで（JLA提供）

オーストラリアで検定官資格取得

１９８７年（昭和62年）、オーストラリアでライフセービング・イグザミナー（検定官）資格を取得した小峯先生は、帰国後、日本人初のライフセービングの指導者認定を受ける。以後、「事故が起きないようにすることがライフセービングの真髄」とその精神の普及に奔走し始めた。

「ライフセーバーとして訓練していることを、いかに日々実践

することがないようにするかが重要です。習った救命技術を使わぬことこそ、最終ミッションなんです」と、危険をキャッチし、救助に至らしめないようにすることが、ライフセーバーに求められていると強調する。

「僕が日本に導入したのは『ライフセービング』です。『サーフ』であると海のシーズンに限られた活動になってしまいます。春夏秋冬、どこにいてもライフセーバーであれ、という思いなんです」

講義を終え学生リーダーに囲まれる小峯先生（中央）

自分の命、そして友の命を守る

力を入れているのが教育だ。子どもたちには、オーストラリアで教わった「自分の命を守るセルフディフェンス」の必要性を訴え、「まず自分の命を守り、もし溺れるようなことになったら友人の命も守る」ことの大切さを伝えている。

小峯先生の本職は「救急医学」を専門にする教育者（流通経済大学スポーツ健康科学部教授）で、「ライフセービングはボランティアです」という。救急医学を学んだのは「教育者は人の命をお預かりする職業であり、何かあったら迅速に処置し、安全搬送できるような資格をとる必要がある」と考えたからだ。恩師に教わった「学ぶことをやめた時、教えることもやめなさい」という言葉を忘れずに教壇に立っている。

いま、ライフセーバー（有資格者）は日本全国で3万人を超える。また全国約２００ヶ所の海水浴場にライフセービングクラブが設置されて、10年で２５０００人もの命が救われている。一方、海外に目を転じれば、アジア太平洋地域では年間13万人が水辺で亡くなっている。「アジアでのライフセービングの普及が急務です」と小峯先生は海外での活動にも力を入れている。

身体をつかって心を学ぶ

冷静に対処できるセーバーに

昨年3月11日の東日本大震災による津波で多くの人が亡くなったことで、「ライフセーバーに求められるものが変わってくると思います。迫りくる津波に、1人も残さず、しかるべき所に避難してもらうには、冷静に対処できるリーダーシップが求められます」と小峯先生。休日返上での普及・教育活動に奔走する日々は、まだまだ続く。

（学生記者　梶原麗奈＝大学院公共政策研究科修士2年）